〔研究論文〕

堀之内II式土器小考 —(1)

——千葉県北部における分布とその様相——

庄司　克

はじめに

縄文土器というと、一般にはつくりの豪奢な中期土器を連想しがちであり、この時期が普遍的に縄文文化の最盛期であるかの如き印象を与えやすい。しかし実際には、土器のつくりや装飾が文化の盛衰をそのまま反映しているとは限らない。仮りに八ケ岳山麓などの中部山地における縄文文化の最盛期が中期であったとしても、それはあくまでもその地域における現象であり、これがそのまま他地域にあてはまるとは限らないのである。

たとえば、東京湾沿岸地域では縄文後期になると、土器の形態や装飾は中期土器に較べて小型・偏平となる。このため、文化内容までが中期に比して一見貧弱そうに見えるが、実際には、遺跡の数では明らかに中期より後期のものが多く、その規模でも中期の集落遺跡にひけをとらない。中部地方の集落遺跡と比較しても、長野県の与助尾根遺跡や尖石遺跡に勝るとも劣らない大集落址が東京湾沿岸地域には、めじろ押しに並んでいる。

とくに千葉県では、馬蹄形貝塚に代表される漁撈活動を特長とする縄文文化が、後期にその頂点に達したことはすでに周知のとおりである。

東京湾沿岸地域に、一大漁撈文化を築いた後期縄文時代人の使用していた土器は、その器面から派手な装飾やマジカルな臭いの強い立体的な文様を排除した、まさに機能優先の器だったのである。

筆者は昭和39年頃より卒業論文の資料作成のため、千葉県内各地に収集・保管されている後期縄文土器の所在確認調査を行なったが、調査が進むにつれて当初考えていたより、はるかに多い後期土器とその遺跡の存在に驚かされた。この調査によって得た筆者の所見では、県内における後期土器のうちで量的に多く、その分布に普遍性を持つのは堀之内I式土器である。この堀之内I式土器は、中期の勝坂式や加曽利E式土器のような立体的な装飾もなく、かといって加曽利B式土器のような機能美にあふれる洗練されたつくりでもない。俗っぽい言いかたをすれば、いかにもやぼったいとしかいいようのない土器である。

そのせいではあるまいが、ほとんどの場合、その扱いは冷遇されていた。古物商の商法と所蔵者の方々の意識を比較するつもりはないが、筆者自身実際に各地を巡ってみて、みばえのする他型式の土器に較べて、その扱いに格段の差のあることに不満を抱いた記憶がある。

考えてみれば、堀之内式土器は学界でもあまり注目されたことがない。筆者自身、この調査中に後期土器に関する文献をあちこち捜してみたが、当時、その少なさにあらためて驚いた次第である。組織的な調査と文献の少なさに比して、表採資料や未発表資料の驚くべき漠大さ、これが、つい最近までの後期土器研究を象徴していたといえよう。

さて、千葉県下の後期縄文土器の所在確認調査を行なうにあたって、筆者はまず最初に下総台地を、㋑東京湾に面した海岸地帯と㋺内陸の印旛沼・手賀沼に面した湖沼地帯とに二分し、両地域における遺跡の分布状況を分析してみた。その結果東京湾側では、圧倒的に後期初頭の堀之内式期に属する遺跡が多く、内陸側では中葉の加曽利B式期から後半の安行式期にかけての遺跡が主体を占めていた。しかも、前者は中期の加曽利E式から続く大集落址が多く、環状・馬蹄形を呈する大型貝塚を伴ない、後者は点列状の小貝塚を伴なうという興味ある結果を得たのである。

さらにこの調査では、縄文後期の土器型式の中でもかなり普遍的に生活面を有する時期と、生活面はおろか文化層さえもほとんど不明確な時期とがあり、しかもこれらは、その時期の土器の組合せにもかなり明確な差を有するという結果が出た。たとえば、千葉県北部地域の後期初頭〜中葉においては、前述の如く東京湾に面した海岸地域と、印旛・手賀沼を中心とした内陸地域ともに、その時期的に占める主体的・客体的な差こそ有するが、

いずれも堀之内Ⅰ式期と加曽利BⅠ・Ⅱ式期では明らかに住居址などの生活面が確認されており、同時に土器をはじめとする生活用具類も多形態にわたって発見されている。

ところが、堀之内Ⅰ式と加曽利BⅠ式の中間に位置する堀之内Ⅱ式期の生活面や文化層についての報告は、ほとんど皆無といってよいほど少ない。

しかも土器の形態はいわゆる精製深鉢形と注口形、内面に沈線を施した浅鉢形といった、ごく限られたものしか把握されていないのである。

このように、堀之内Ⅱ式は縄文後期の年代的序列の中で他型式と同等の位置を与えられておりながら、その生活面は現時点までほとんど不明確であり、生活用具としての土器のセットについても不完全と言わざるを得ない状況にある。

はたして、堀之内Ⅱ式土器は、時間、空間を規定しうるものとして、山内清男氏が設定した「型式」としての条件を満たしているのであろうか。このへんが、そもそも堀之内Ⅱ式を「幻の型式」とする故以であり、筆者の卒業論文のポイントでもあった。

この小考は、筆者の卒業論文中よりとくに堀之内Ⅱ式に関する部分を修正・加筆したものであり、その分布と様相について若干の私見を述べてみたいと思う。

Ⅰ　堀之内Ⅱ式土器小史

（堀之内式土器の研究史についてはすでに斉藤弘道氏によって詳細な論文（註1）が発表されている。ここではその概略を記するにとどめたい。）

今さらいうまでもなく、堀之内式土器は千葉県市川市北国分町に所在する堀之内貝塚出土の土器を標式として、大正13年に山内清男氏によって設定された。そして昭和3年には、同氏によって堀之内式は加曽利E式と加曽利B式の中間に位置することが明らかにされた（註2）。

さらにその後、堀之内式は新・旧二型式に細分されている。山内清男氏は『日本先史土器図譜』第Ⅵ輯（註3）の中で、この旧・新二型式について次のように述べている。

「旧型式では器の大なるもの多く、比較的厚く、口辺部には把手及び把手の縮小して生じた小突起に富んでいる。文様の磨消縄文も直前の加曽利E式からの伝統を多分に持っている。新型式に於いては小型となり、磨消縄文は極めて繊細なものとなり、漸次加曽利B式に近似する傾向を持って居る。」と両者の特徴について述べている。

また、「しかしながら堀之内式は加曽利E式及びB式間の中間型式ではなく、独立した部分を持っている。また、堀之内旧新両式も亦夫々別個の特有な土器とすべきものである。」とし、堀之内式を加曽利E式と加曽利B式の中間に位置づけ、これらとは別個な型式としている。しかしながら、山内清男氏は、この引用文の最後にあるように堀之内新・旧両型式を互に独立した型式として認めながらも、実際には新型式つまり堀之内Ⅱ式土器の解説については精製深鉢形と注口形の2形態しかふれていない。これは、その前後の型式（堀之内Ⅰ式、加曽利BⅠ式、同Ⅱ式）が同文中において深鉢形、鉢形、浅鉢形、碗形、壺形、注口形など多形態にわたって詳しく解説されているのに較べると極めて不自然である。

斉藤弘道氏は、「堀之内式土器研究のあゆみ」（1978）の中でこの点にふれ、山内清男氏は生前『日本先史土器図譜』第Ⅵ輯中で堀之内式土器の解説にあたって、「これら14個体の土器だけをもって堀之内式土器の全容は解説しがたいことを山内氏自身も認めており、後日補うことを約していたが、ついにそれは実現されなかった。」「堀之内式土器は、その意味では未解明の部分を残している土器形式の一つであろう。」と述べ、暗に堀之内式土器の型式的不備を示唆しながらも、この山内氏の解説は戦前における堀之内式土器研究に大きな区切りをつけたもので、同型式の研究史上最も重視されるべきものであるとの評価を与えている。

もっとも、この山内氏の図版入りの解説が出る前に、八幡一郎氏によってすでに堀之内土器が型式的に二分される旨の記述が行なわれている。昭和13年に発表された「縄文式文化」（註4）中で八幡氏は、次の如く述べている。それは、「関東地方の堀之内式土器なるものを、仔細に吟味すると一方においては中期土器の要素を含む群があるのに、他方には後期土器の先駆をなす群がある。この二つの群は一緒であるのが一般であるけれども、層位的に上下の関係を示すこともあり、又前者が中期遺跡に後者が後期遺跡に夫々混合して発見される場合の尠くないなど、明らかに漸々徐々の推移の過程が見られるのである。」という一節で

ある。同氏はさらにこの中で、両者の土質や文様さらにはそのつくりにも言及し、前群がより中期的であり、後群は後続の後期土器へと発展する胚胎的要素を持っていると指摘している。しかし、八幡一郎氏のこの解説は、全体に図が少なく解説も抽象的で、山内氏の『日本先史土器図譜』との間には、格段の差があると言わざるを得ない。

ともかくこうして堀之内式土器は二型式に細分され、後期初頭の土器型式として不動の位置を占めるようになる。そして昭和20年代に入ると、それまで山内清男、八幡一郎、甲野勇氏らを核として行なわれてきた編年研究は、吉田格、芹沢長介、江坂輝也氏らによって新しい展開をみせるようになる。

まず昭和25年、堀之内式土器は芹沢長介氏の、『古代土器標本解説集』(註5)において、はじめて堀之内Ⅰ式・Ⅱ式というローマ数字による表示法によって登場する。芹沢長介氏はこの中で、堀之内式土器の概要については、「同じ堀之内式の中にも神奈川県を中心とするものと、千葉県を中心とするものとでは、若干の地方差が見受けられ、また年代的に見ても古い部分（中期末の加曽利E式に近い）と新しい部分（後期中葉の加曽利B式に近い）とに区別される。」と、その冒頭では、『日本先史土器図譜』第Ⅵ集・堀之内式の解説文中で、山内氏が明らかにした内容をそのまま継承した形をとっているものの、旧・新両型式の細かな特長については、形態別にその形状、口縁部の特長や文様に至るまで細かく解説している。とくに堀之内Ⅱ式土器については、はじめて山内氏が『日本先史土器図譜』でとりあげた深鉢や注口土器以外の形態にも言及し、次のように述べている。

「新しい部分の堀之内式（堀之内Ⅱ式）は文様帯が口辺に近く集約し、無文の滑沢面が多くなる傾向をもつ。文様は直線的な構成が圧倒的になり、磨消手法も盛行し縄文はこまかくほそくなる。器をめぐる隆起帯も口辺に接近し、殆んど横に走る場合が多く、等間隔をもって8の字形の粘土紐を貼りつけている。器形もやや複雑の度を加え、鉢又は深鉢は、底部が大きく反りかえり、突起は少ない（図5.7.8)。図5は標本に選んだ堀之内貝塚出土の標式的浅鉢形土器、土瓶は把手と注口部とがはっきり別れ、高さに比して横巾のひろいどっしりした形が多く、文様は精巧に細い沈線を以て描かれる（図6)。（中略）、」これはいわゆる、堀之内Ⅱ式の精製深鉢形土器のことである。

そしてこの他に、イ、ロが大きく外反し、隆起帯によって頸部から隔てられた胴部には磨消縄文が施される「大波状口辺をなす深鉢」や、ロ、「口に近い横断面が、三角形や菱形を呈する反りかえった鉢」あるいは、ハ、「達磨のような小突起を持つ深鉢」、ニ、「内面に平行した幾本かの沈線を持つ深鉢」、ホ、「粗製の縄文のある深鉢」、ヘ、「つまみのある蓋付土器」等の存在を明らかにしている。

これらのうち、ロの深鉢やホの縄文のある深鉢は、図示こそされていないが、芹沢氏によっておそらく初めて加えられた形態である。

堀之内Ⅰ・Ⅱ式という名称はこれ以後、昭和28年・吉田格「石器時代の文化」『石器と土器』（註6）、昭和31年・吉田格『日本考古学講座3』（註7）、昭和32年・江坂輝也『考古学ノート先史時代（Ⅱ）』（註8）同年・清水潤三「堀之内貝塚シーⅠ、シーⅡ地点発掘報告」（註9）、昭和34年・金子浩昌「築地貝塚」（註10）、同年・伊藤和夫「千葉県石器時代遺跡地名表」（註11）と引き継がれてゆく。

この中で注目すべき文献は、昭和31年に出版された吉田格氏の「各地域の縄文土器・関東」（『日本考古学講座』3）である。その一節は、文中の「堀之内Ⅱ式土器は、堀之内Ⅰ式土器より加曽利B式への移行期の土器であって、堀之内Ⅰ式よりも薄手である。（中略）」というものである。

これは、山内清男氏が『日本先史土器図譜』第Ⅵ輯中で「関東地方の堀之内式は、型式の年代順に於いて、中期の終末即ち加曽利E式の新しい部分と、後期中葉の加曽利B式の中間に当ると共に、土器の形態装飾に於いても、両者の中間を占めるものとしての特徴を持って居る。（中略）」とした堀之内式土器の概念をさらに一歩進めたものであると同時に、G・グロートらが『姥山貝塚』(註12）で否定した堀之内Ⅰ，Ⅱ式の年代的序列を再度登場させたというところに意義がある。

一方、山内清男氏は『日本先史土器図譜』以後、『縄文草創期の諸問題』中で堀之内1・2という算用数字による表示を行っただけで、その後、堀之内式土器についての見解を書き表わしていない

ため、詳細は不明であるが、昭和39年・『日本原始美術１』（註13）の巻末〈付表３〉「縄文土器型式の編年比較表」（作成・磯崎正彦氏）に表示された、堀之内１式・２式という表示法を一貫して使用していたようである。これは、多分に山内氏の型式設定の際の命名法によるものと思われる。（註14）

この算用数字による表示法は、昭和34年・『世界考古学大系Ｉ』（註15）中において文中では吉田格氏が「魚撈文化の展開」で、また巻末挿表「日本各地の縄文式土器形式編年と推定文化圏」では江坂輝也氏が使用しているが、『日本原始美術』以後この表示法は用いられず、Ｉ式、II式というローマ数字による表示が一般化する。(註16)

堀之内II式土器は、以上のようにその型式名は時代により、研究者によって変移しているものの、その内容についてはさほどの変化はみられない。

とくに堀之内II式土器の形態については、従来まで『日本先史土器図譜』第VI輯で山内清男氏の示した精製深鉢と注口土器にのみ言及されていたきらいがあったが、昭和30年代に入ると、さらに２～３の形態を加えようとする動きがみえはじめる。清水潤三氏は「堀之内貝塚シーＩ、シーII地点発掘報告」(註17)中で、かなり明確に堀之内式土器の新旧を分類しており、中でも胴部の屈曲の著しい鉢形土器をII式相当として報告している。また磯崎正彦氏は『日本原始美術Ｉ』(註18)で、内面施文の鉢、皿形土器をII式として解説している。

ただ、山内清男氏が『日本先史土器図譜』第VI輯で図示した58―２図や、芹沢長介氏が「達磨のような小突起を持つ深鉢」「内面に平行した幾本かの沈線を持つ深鉢」と評した口縁、底部の外反が小さく、全体に細長い深鉢で、口辺にキザミ目を有する隆線の下に巾の狭い縄文帯をめぐらしたものは、現在では加曽利ＢＩ式の範疇に入れられるべきものである。また、芹沢長介氏は昭和25年に既述の如く、堀之内II式土器の一形態として、「粗製の縄文のある深鉢」をあげているが、筆者は当時すでに、この手の形態の存在に着目していた氏の観察力に注目したい。

昭和40年代に入ると、主に千葉県を中心として、東京、神奈川などの東京湾岸地帯で漠大な数の縄文後期の遺跡が発掘され、しだいに堀之内II式土器の報告も定着的になる。しかし依然として、その報告の中で主体を占める形態は精製深鉢や注口土器を中心とする２～３の形態であり、粗製深鉢について言及したものはほとんどない。また、遺跡から発見される堀之内II式土器の絶対量が少ないことも、しだいに注意されるようになる。とくに、最近のように開発に伴って後期の遺跡が数多く調査されればされるほどに、以上述べてきたような堀之内II式土器の特殊性が浮かびあがってくるのである。

昭和45年、安孫子昭二氏は『神明貝塚』(註19)の図版解説の中で、はじめて堀之内II式の粗製土器についてふれ、次のように述べている。

「堀之内II式（第14図15、16、18、第21図１～15、21）として識別される土器はきわめて少なく、図示する資料がその殆んどである。それらの土器は胴上半に幾何学的な構図の描かれる深鉢の類、それに浅鉢、注口土器の類である。しかし、これらの土器のみで土器組成をなしたことは考えがたい。恐らく、堀之内Ｉ式第21類の縄文のみの一群のいくつかはII式期であろうと考える。」

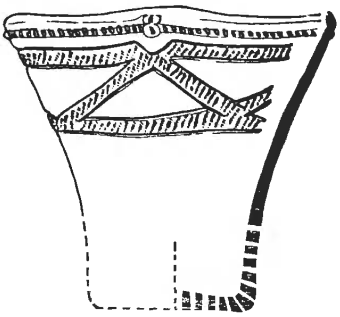
実は筆者も、従来より堀之内II式土器については他の型式との重複という見解を持っていた。しかし、筆者の場合は単に堀之内Ｉ式とII式のみの重複関係としてでなく、粗製深鉢はともかく他の２～３の形態については、むしろ加曽利ＢＩ式に近い特長を備えているという所見を、千葉県下の所在確認調査の段階で有していた。つまり、その意味で筆者は、前述の吉田格氏の指摘のとおり、「堀之内II式土器は、堀之内Ｉ式土器より加曽利ＢＩ式土器への移行期の土器であった。」と考えている。

II　堀之内II式土器に関する２～３の問題

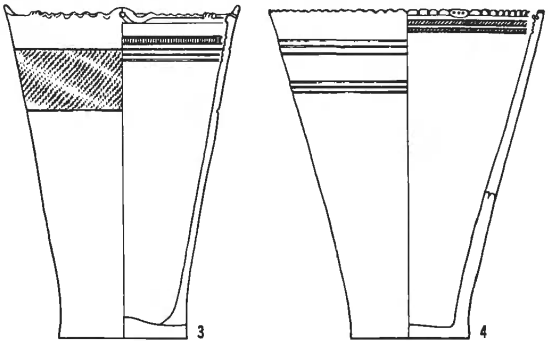
堀之内II式土器について、筆者が問題としているのは次の三点である。

1．型式設定後、現在まで２～３の限られた形態しか把握されていない。
2．土器の出土量が絶対的に少ない。
3．住居址等の生活面がほとんど確認されていない。

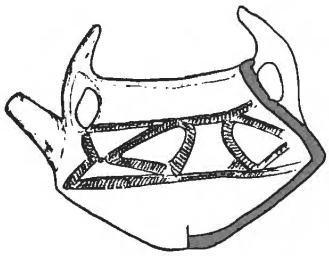
１について考えられることは、まず第１に安孫子昭二氏の指摘の如く、この時期の土器形態の主体を占めるはずの粗製深鉢形土器が、前後の型式とはまったく分類不可能な状態にあったこと。こ



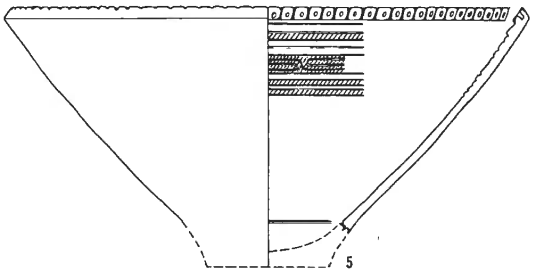
第１図　堀之内II式の精製深鉢形土器
（市川市堀之内貝塚表採―筆者）



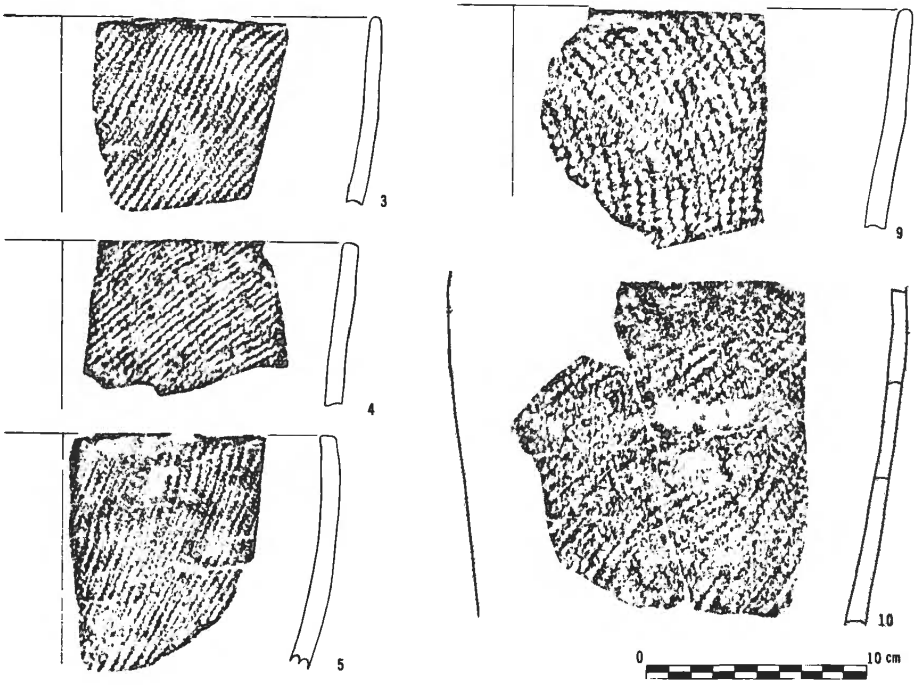
第３図　加曽利ＢＩ式の精製深鉢形土器（『神明貝塚』より）



第２図　堀之内II式の注口土器
（千葉市加曽利貝塚出土）



第４図　内面施文の浅鉢形土器（加曽利ＢＩ式）
（『神明貝塚』より）



第５図　縄文を施した深鉢形土器（『神明貝塚』第21類の一部）

れをさらにつきつめてゆくと、まず㋑堀之内Ⅰ式と堀之内Ⅱ式の粗製深鉢が時間の経過にもかかわらず、型式的にまったく変化していないこと。つまり、精製深鉢や注口土器は時間と共に変化しているのに、粗製深鉢だけは二時期にわたって、まったく同じものが使われていたという場合。㋺は、堀之内Ⅰ式と同Ⅱ式とは確かに変化しているが、その差は他型式間にみられるほど顕著でなく、両者の特長が極めて近似しているため、判別不可能な場合である。

そして第二には、いささか極論かもしれないが、他の型式には存在した「粗製深鉢形土器」が、何故か堀之内Ⅱ式期にはつくられなかった。つまり、堀之内Ⅱ式土器群は、精製深鉢、同浅鉢、注口土器といった限られた形態しか、もともと存在しなかったという考えである。

このような土器型式の吟味に関する問題は、筆者ごときの若輩が論ずるには、まことに僭越しごくなところであるが、あえてここに大方の叱正を覚悟の上で私見を述べる次第である。さて、次にここで一つはっきりさせておかなければならないことがある。それは、これらの土器型式は考古学研究の一手段として便宜的に設定されたものであるということである。

したがって、現在では常識化している各型式間における土器群の変遷過程は、あくまで便宜的なものであり、実際問題としては、一型式内のすべての形態がある時間の経過と共にまったく同時に変化をとげたとは断言できない。むしろ、各形態によって、その変化には時間的な巾や違いがあって当然のことではなかろうか。筆者の所見ではこのあたりの把えかたが、堀之内Ⅱ式の有する様々な問題に関係があるように思えてならない。実をいうと、これは何も堀之内Ⅱ式土器に限ったことではない。称名寺式や曽谷式など縄文後期の土器型式の中にも同様の問題を認めることができる。

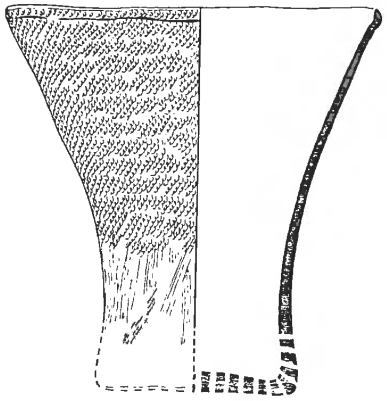
しかも、これらは既述の如く、全ての形態が前後の型式と判別困難というわけではない。その型式設定の決め手となった2～3の形態は、たしかに独特の個性を持っている。しかしいずれの場合も、この特長ある少数派土器に伴なうはずの、煮沸などの実用専門の粗製土器群が明確に把握されていないのである。

もう少し堀之内Ⅱ式土器について考えてみよう。堀之内Ⅱ式として最もポピュラーな精製の深鉢は、口縁、底部とも大きく外反し、「朝顔形の深鉢」と俗称されるほど特長的形状を呈し、口縁部の無文帯とその直下にある細隆線や8の字形のとめ飾りは、独特のものである。（第1図）また、表面が無文で、内面に平行線や渦巻文を施文した浅鉢や体部がくの字状に屈曲し、ソロバン玉のような胴部の上半に磨消縄文を施した注口土器なども特色の強く出た形態である。（第2図）これらはいずれも堀之内Ⅰ式から発展したものと把えられており、注口土器の一部にはⅠ式かⅡ式かの判別が不明なものもある。しかし、堀之内Ⅱ式の精製深鉢や内面施文の浅鉢の系統は、明らかに加曽利BⅠ式にも引きつがれている。

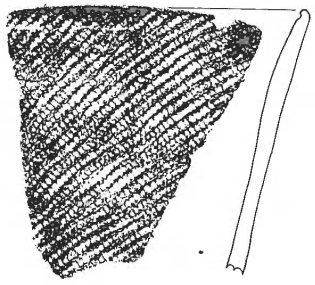
たとえば、加曽利BⅠ式の精製深鉢は、堀之内Ⅱ式に比して口縁、底部の外反度が小さくなり、口縁部の無文帯の屈曲がなくなって扁平となり、内面に平行線やキザミ目等の施文がある。そして、文様帯は口縁部に集中し、無文部はてかてかに研磨される（第3図）。かたや、内面施文の無文浅鉢（皿）は渦巻文様や大きな突起はなくなり、列点文やキザミ目文が連続して付され、口縁の列点文直下には断面三角形の隆線が付けられる（第4図）。上記二者は、堀之内Ⅱ式と細かい点で相違するものの、その形態や文様構成は極めて近似しており、この形態に関しては、堀之内Ⅰ式より加曽利BⅠ式との関連が認められる。

そして、問題の粗製深鉢形土器である。現在までのところ、明確に堀之内Ⅱ式の精製土器と伴出したものはない。もっとも堀之内Ⅱ式の単独の生活面ないし文化層が不明瞭なため、この確認は困難である。したがって、現時点では堀之内Ⅱ式の前後の型式、つまり堀之内Ⅰ式および加曽利BⅠ式土器群の中から同系統の形態を分析し、その中からこれらの型式に属さないものを摘出するか、あるいは堀之内Ⅱ式土器の特長を備えたものを型式学的に分類するかという程度のことが、最も作業としては具体性がある。しかし、本来的には、精製深鉢や他の特長ある形態との伴出関係を、発堀調査によって確認するなどのデーターの集積が必要であろう。

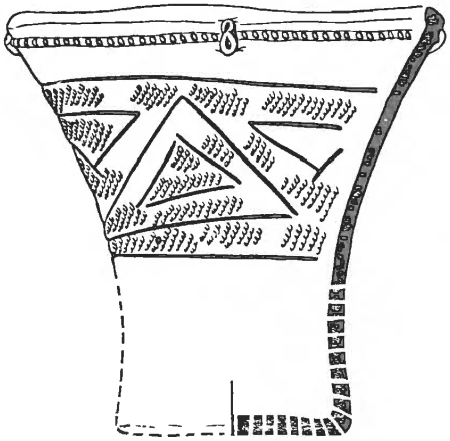
第5図は、安孫子昭二氏が指摘した神明貝塚出土の土器群の一部である。安孫子氏は、これらの



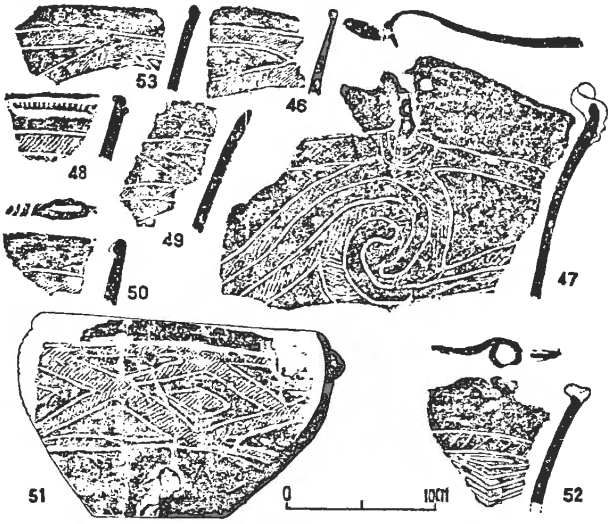
第６図(1)　縄文を施した深鉢形土器
（市川市堀之内貝塚表採―筆者）



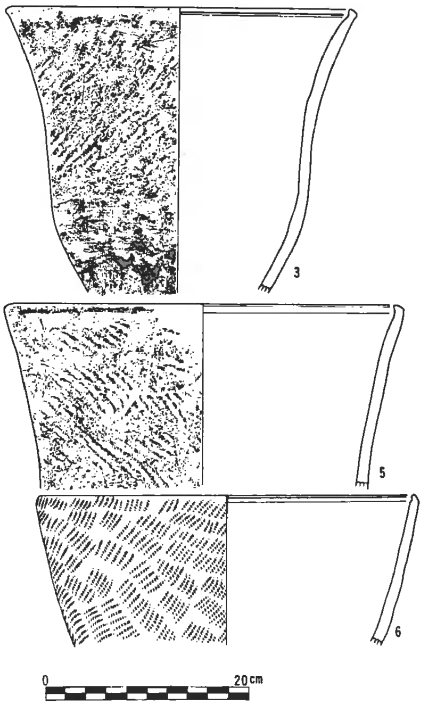
第６図(2)
口縁内側に沈線を回らした
縄文装飾のみの深鉢形土器
（市川市堀之内貝塚表採―筆者）



第８図　堀之内Ⅱ式の精製深鉢形土器
（市川市堀之内貝塚表採―筆者）



第７図　市川市堀之内貝塚出土の堀之内Ⅱ式土器
（清水潤三「堀之内貝塚シーⅠ、シーⅡ
地点発掘報告」第12図第６類土器）



第９図　東正院遺跡出土の縄文を施した深鉢形土器

うちのいくつかは堀之内II式であろうとしている。

第6図1・2は、筆者の採集した資料である。このうち1は、堀之内II式の精製深鉢形土器の破片と交互に折り重なって発見された。その他に2の如く、口縁部が外反気味で、器面は斜縄文のみ口縁部の内側に1～2本の沈線をめぐらした、全体に薄手の深鉢がこの時期のものではないかと考えている。

さて、その次には、堀之内II式土器の出土量が他型式に比して絶対的に少なく、しかもこの型式を出土する遺跡が極端に少ないという問題がある。これも筆者が、後期土器の所在調査を始めたときから持っていた疑問の一つであったが、以後十数年経過した今日、この間に県内各地の遺跡が大量に調査されたにもかかわらず、今もって判然としない状況にある。

堀之内II式土器群は、県内各地をはじめ関東一円でも、単一遺跡からまとまって出土することはほとんどない。これは前項でも取りあげた如く、なにも粗製深鉢にのみ限ったことでなく、その他の形態でさえもほとんど少量しか出土せず、下総台地や北総地域など、かなり広汎な地域の遺跡群から出土したものを集めて、はじめて、他型式にみる程度の量を揃えることができる。堀之内貝塚でもそれは例外でなく、第7図に示したものは、『人類学雑誌』第65巻5号に掲載された清水潤三氏の報告より引用したものである。第8図は、筆者が堀之内貝塚にて収集した土器片からの復原であるが、これらはすべて破片であり、この手の完形品を捜すことは極めて困難である。

この第二の問題点は、前者に劣らないほど大きな問題である。つまり、堀之内II式土器が、その形態に多少の不備はあっても、まがりなりに縄文時代の一時期を画するほどに、普偏的に分布し、時間、空間を占有することが認められれば、これらの尺度としては有効であろう。

しかし、数ある遺跡群の中で本式土器を出土する遺跡が限定され、しかも出土量が極く少量で、その出土状態が不安定であるとするならどうだろう。次の引用資料は、昭和40年代後半に出版された発掘報告書である。これらは、文中でのとりあげかたに多少の差はあるが、いずれも堀之内II式土器について図示・解説している。

まず、昭和47年『東正院遺跡調査報告』(註20)で鈴木保彦氏は、同遺跡の第III層、IV層中より堀之内I式・II式土器、加曽利BI式、II式土器の破片が、かなり大量に出たとし、拓本や実測図による解説を行っている。ここでは、堀之内II式土器はI式土器と区別されず、「第8群土器〔後期初頭の土器〕」中の第1類、第3類～第5類土器として扱われている。このうち堀之内II式として確認できるのは、図示された資料でみるかぎりでは、圧倒的に胴部上半に磨消縄文を有する精製深鉢が多く(第1類、第3類土器)、稀に胴部がくの字形に屈曲する鉢形もみられた。縄文のみの粗製深鉢形土器も、第4類として図示されている(第9図)が、型式名は付されていない。

昭和48年発行の『貝の花貝塚』(註21)では関根孝夫氏が、「IV群土器、縄文時代後期前半」の第5類土器としてとりあげ、その説明として、「…土器は一般に小型化し、器種は多くない。口縁に刻目隆帯と8文字が顕著であり、口縁内側の凹線も特徴相であるV群土器(註、加曽利B式)にきわめて近い土器である」としている。いうまでもなく、これらのほとんどは堀之内II式のいわゆる精製深鉢形土器である。但し、図示された資料の中には注口土器(完形2点含む)と、堀之内I式II式とも判定できない縄文のみの粗製深鉢もみえる。

また、同年『袖ケ浦町山野貝塚』(註22)中で西山太郎氏は、出土土器の分類にあたり、(I)～(V)類に分け、さらにこれらを器形によってa～jに10区分した。大分類では堀之内II式はI式と一括され、後期前半(I)期に包括している。器形による分類では、いわゆる堀之内II式の精製深鉢形土器を「b―口縁部から胴部に直線的に向う深鉢形土器」に比定しているが、図示された資料にみるかぎりでは、この手の土器は他型式のものに較べてやはり少ない。また、西山氏は器面の整形順位によって、後期初頭の土器群をA_1～A_4、B_1～B_2型に分類し、「A_1ないしA_4型を有する時期以後を堀之内II式と考えることができるのであり、堀之内I式と従来考えられてきたBII型の深鉢型のあるものは、堀之内II式の構成員になる可能性が強い」とし、器面の整形手法という従来とは別の視点から、「従来の堀之内I式のあるものは、堀之内II式の中にも存在する」という興味深い見解を示している。

このように、つい最近の組織的大調査によっても、堀之内II式土器の把え方は、山内氏が型式として設定した時点とさほど大きな変化はみられない。これを堀之内II式の型式的不備とするには、現時点では性急すぎるかも知れない。

しかし、他の型式とその内容を比較するとき、あまりにも明白な差を有するのは、もはやまぎれもない事実と言わねばならない。

最後に、堀之内II式の特殊性を決定づける要素として、伴出遺構の少なさを忘れてはならない。日本考古学が始まって以来100年余、他の型式ではこの間に着々と伴出遺構のデーターを蓄積しているが、本式に限っては、この判出例はまことに稀なことと言わねばならない。堀之内II式が誕生してからこのかた、前掲の東正院遺跡、貝の花貝塚、山野貝塚においても、堀之内I式と加曽利BI式等の住居址や遺構は確認されても、堀之内II式の遺構は、ほとんど検出されておらず、（註23）文化層さえも不明確な状態である。

これは、いったい何を意味するのであろうか？

（千葉市加曽利貝塚博物館・学芸員）

〔脚註〕

(1) 斉藤弘道「堀之内式土器研究のあゆみ」『茨城県歴史館報5』昭和53年

(2) 山内清男「下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』第43巻10号　昭和3年

(3) 山内清男「堀之内式土器」『日本先史土器図譜』第VI輯

(4) 八幡一郎「縄文式文化」『日本文化史大系原始文化』　昭和13年

(5) 芹沢長介「後記・晩期じょう文式文化」『古代土器標本解説集』　昭和25年

(6) 吉田　格「石器時代の文化」　『石器と土器』昭和28年

(7) 吉田　格「各地域の縄文式土器　関東」『日本考古学講座3』　昭和31年

(8) 江坂輝也『考古学ノート先史時代（II）』昭和32年

(9) 清水潤三「堀之内貝塚シ―I、シ―II地点発掘報告」『史前学雑誌　―　』　昭和32年

(10) 金子浩昌「築地貝塚」『印旛手賀』　昭和34年

(11) 伊藤和夫「千葉県石器時代遺跡地名表」昭和34年

(12) G・グロート、篠遠喜彦『姥山貝塚』　昭和27年

(13) 磯崎正彦「縄文土器型式の編年比較表」『日本原始美術I』　昭和39年

(14) 明治大学教授・戸沢充則氏のご教示によれば、山内清男氏は新型式設定の際、次のように型式名の語句を使い分けたという。

（E・B→発掘地点別、1・2→層序関係
a・b・c →型式分類）

(15) 八幡一郎編集『世界考古学大系I』昭和34年

(16) ①岡本勇、戸沢充則「後期縄文土器」『日本の考古学II』縄文時代　昭和40年

②岡本勇「土器型式の概観」『新版考古学講座』3　先史文化　昭和44年

(17) 前掲書

(18) 磯崎正彦「縄文土器各論　IV後期の土器」『日本原始美術I』　昭和39年

(19) 安孫子昭二『神明貝塚』　昭和45年

(20) 鈴木保彦『東正院遺跡調査報告書』昭和47年

(21) 関根孝夫「IV群土器、縄文時代後期前半」『貝の花貝塚』　昭和48年

(22) 西山太郎「第3トレンチ出土土器について」『袖ヶ浦町山野貝塚』　昭和48年

(23) 堀之内II式期の住居址として県内で唯一確認されているのは、市川市曽谷貝塚から発見されたM1号住居址である（『市川市史』第1巻、(9)曽谷遺跡）